高崎正風大人

歌論附

中村正直　物集高見
丸山作樂　中村秋香
小中村清矩　雨宮干信
栗田寛　丸山正彦　諸先生題辭序評

國歌要論

小中村義象
萩野由之　先生同著

吉川半七印刷

宮内省御藏板　鹿持雅證大人著

萬葉集古義

木板美刻
美濃紙摺
定價金貳十圓
發賣價金十六圓

五十二冊出板

萬葉集ハ我國古書ノ一ノ當時ノ人情風儀ヲシリ又事物ノ稱呼沿革等ヲモシルニ足レリ然レ共其注解ノ書數部有ト雖皆全キモノナシ近世土佐ノ學士鹿持雅證大人萬葉集古義ヲ著セリ蒐輯殊ニ廣ク眞ニ完全ナリ　今上陛下之御爲ニコレヲ奏シ　上命シテ土佐ニ召サシム然ルニ雅證大人生涯ノ力ヲ盡シ世ヲ去ル迄校合セラレシ又卷帙甚多キガ爲全本ニ乏シ雅證大人ノ門高知縣士族福岡孝廉氏ヲシテ本編百卷ヲ奉ラシム附錄二十卷ハ雅證大人ノ嗣子飛鳥井雅慶氏ノ奉ル所飛鳥井雅慶氏其他ノ門人等トハカリ更ニ校正淨書セシ故萬葉集注釋ノ書中ニ於テ殊ニ光榮有一書世ニ出現セリト云ベシ忝ナクモ獎舖ニ於テ雕刻發賣ノ恩命ヲ蒙ルニ依テ世ノ古書ヲ好ム諸君ニ謹テ報告ス

宮内省御用書林　吉川半七敬白

題辭

國學非無用〻之非

其人與政治學理

森岡私記

懸隔無通津二子
察弊孔聾革方案
陳豁然排雲霧
現出廬山真此論
施之實可以助日新
謳歌亦優美可以

感鬼神

敬宇中村正直

中村正直
東京敬宇

古語ニ言ハヽ世ヨ國ニ入ルヤ必ズ
其ノ政ヲ聞クヤ必ズ學ブヤ必ズ
之ヲ求ムルヤ必ズ
此ノ五者ハ天ノ生ズル所ニシテ
人ノ能ハザル所ナリ
故ニ聖人ハ之ヲ天ニ受ケ
以テ人ニ教ヘ
以テ人ニ授ケ
以テ人ニ治ム
人ハ之ヲ受ケ
以テ人ニ教ヘ
以テ人ニ授ケ
以テ人ニ治ム
人ハ之ヲ受ケ
以テ人ニ教ヘ
以テ人ニ授ケ
以テ人ニ治ム

べきなどつゝ誠ちきゝ回ぐきふち稜。
この二きのさかぐをきゝ、きれいちも
だなるぐきみなのびゝ。きつぐきなどゝ
なりとて、せゝれきたりなを。きるを
いゝをのみきるて、きをきゝぐ。
落きるのみ形づみて、形きをれも

いぐ形ぶ、かゝれ形き人の為ふを、ふを
ゝきゝ見ざまゝぐをいふぐき。長ざ
ゝはぐまゝくいびはぐ長き結ゝを、を
はいぎたれきくをとゝ、よびおこさむをその
すきびなるぐゝ。そは本をもきゝぐび
ゝを、赤ふはるぐき事ゝのを。時世ふ

面白くふこと多くて、以人心
直筆なるべし。そもこの
ひとゝはなきぬ世の云ごとなるを
つぐさせむ時代ふるき
[illegible]四月

[illegible]主人 [illegible]

萩田阪生 [illegible]

國學和歌改良論

緒言

コノ古典學革弊論ハ、斯學ノ振ハサルハ文學上ノ缺典ナリ、速ニ改良セントノ主意ヨリ、書ケルモノナリ、和歌小言ハ古典學ノ改進ヲ謀ランニハ之ニ屬スル和文和歌其他諸項ノ弊ヲ革ムヘシトテ、先、和歌ヨリ論シ、共ニ東洋學會ノ雜誌ニ載テ、學友ニ謀リシナリ書肆見テ曰、コレ今日ノ急務ナリ、抽キテ一書ト爲シ、廣ク世ニ質サハ如何、曰、固ヨリ吾輩ノ志ナリ、但卒爾ノ稿ナレハ、言フヘキコトナ洩シ、モ尠カラス、文モ二論各体ヲ異ニセリ、更ニ稿ヲ改メテ後ニセン、曰否、論旨既ニ明ナレハ、枝葉ヲ增スハ他日ニ讓ルヘシト、乃合セテ一書トナシ、國學和歌改良論ト名ツケ、中村丸山二先生ノ賜序、

及諸碩學ノ評語ヲモ加ヘテ之ニ授ケツ

謂フニ此書一ダヒ出テナハ、世ノ國學家歌師等ノ中ニハ、目シテ輕躁時ニ阿ルトイフモノアルヘク、又ハ己カ藏拙ノ口實ト嘲ルモノモアルヘシ、或、痛言快論倒瀾ヲ挽回スルニ足レリト過賞スルモノモアラン、或、杞憂ヲ同クシ、共ニ改良ノ途ニ當ラント賛成セラル、人モアラン、賛スルモノハ、固ヨリ吾黨ノ士ナルヘク、毀ルモノ亦以テ他山ノ石トナスヘシ、孰カ斯學ノ爲ニアラサラン、希クハ之ヲ看ルモノ、其說ヲ吝ムヿナカレ、記シテ緒言トナス、

明治二十年五月上澣　著者識

國學和歌改良論總目次

國學改良論目次

第一章　總論

第二章　國學陋弊ノ原因

第一　尊內卑外ノ意ヲ誤解シシ事

第二　傳統ヲ重スルカ爲ニ反テ學祖ノ意ヲ失シシ事

第三　神典學ヲ本トスル事

第四　詠歌ヲ以テ國學者ノ本分ト心得ル事

第三章　國學改良方案

第一　歷史學ト言語學トヲ分ツヘキ事

第二　學生ノ資格ヲ預定シ及ヒ教授法ヲ改正スヘキ事

第三　神道家詠歌黨ニ國學者ノ名ヲ附ス可ラサル事　四
附錄
古典學名義
和歌改良論
第一　和歌ノ流弊ヲ論ス
(一)　歴史亡ヒテ勅撰集作リシ事
(二)　王政ノ衰ヘシハ和歌ノ流行一ノ原因ナル事
(三)　國學ノ不振ハ學者和歌ニ耽リシ故ナル事
第二　和歌ノ改良ヲ論ス
(一)　歌詞
(二)　歌題
(三)　歌格
(四)　歌調
(五)　歌材
(六)　擬古歌ハ新体歌トハ別ナ置クヘキ事
第三　俗謠ヲ論ス

國學和歌改良論

○國學改良論

小中村義象著

第一章　總論

中村秋香云、起句先ッ非凡ト云フヘシ

守舊家ヲ以テ國學者ノ一名トシ、頑固黨ヲ以テ古典學者ノ異名トシ、口ヲ開ケハ輙曰彼ハ古典學者ナリ、何ソ共ニ學事ヲ談スルニ足ラン、彼ハ固陋黨ナリ、宜ク文明社會ノ域外ニ放逐スヘシト、コレ現今普通ノ世論ナリ、甚哉世間妄論者ノ多キヿ、守舊家豈必國學者ナランヤ、古典學者何ソ必シモ頑固黨ニ限ランヤ、然リ而テ世人動モスレハ此ノ妄論ヲ吐クニ至レルハ、彼等斯學ノ神髓ヲ知ラサルニ因ルト雖、ソモ〳〵亦古典學者自取レル過ト云フヘキナリ、

丸山正彦云、世論ヲ假リテ一篇ノ議論ヲ提起シ來ル實ニ妙手ト云フヘシ筆勢凛然聲響アリ

秋香云、公論

雨宮千信云、是解說前段古典學者自取之意

維新以來奎運隆盛、百般ノ學術日ヲ逐テ新ニ、昨是非殆、底止スル所ヲ知ラサルノ勢アリ、唯我國學者ノミ日進急流ノ現況ニモ拘ラス、徒ニ舊套ヲ墨守シテ改進ノ氣象ニ乏ク、或山村僻野ニ隱退シテ詩歌風月ヲ事トシ、或陳腐迂濶ノ策ヲ講シテ自足レリトシ、泰然獨立斯學ノ本義ヲ講シテ之カ振張ノ方法ヲ論スルモノ甚鮮シ、是ナ以テ國學ノ名聲愈地ニ墜チ遂ニ世ニ無用視セラルヽニ至リシナリ」、今近ク譬ヲ取テ古典學ノ現況ヲ評セン、爰ニ自由教育ヲ受タル一淑女アリ、此女常ニ翁媼ノ管理スル所トナリテ可惜春秋ヲ舊慣中ニ經過セハ、外方ノ人士皆之ヲ見テ、其女ノ主義ノ如何ト思想ノ如何トヲ論セス、直チニ翁媼ヲ見ルノ眼ヲ一轉シテ是モ亦天保娘、寛政女ト嘲リテ相齒スル者ナキニ至ラン、適、才士有テ此女ノ思想愛ス

栗田寛云、自由結婚、女權伸暢、恰好ノ比喩トモ思ハレス、カク云フ翁モ天保年間ノ人ナレバニヤ、

ヘキヲ知リ、相共ニ交際シテ其精神及ヒ思想ノ高尚ナルヲ世人ニ開示スル者アリト雖、僅ニ翁媼監視ノ隙ヲ偷テ、其手足ノ一邊ヲ伺ヒタルニ過キサレハ、其言フ所此女ノ性質ノ一端ヲモ盡スヿ能ハス、啻ニ其一端ヲ盡スヿ能ハサルノミナラス、或本來ノ性質ヲモ誤解スルノ憾ナキヿ能ハス、此女素ヨリ上等ノ交際ヲ欲セサルニ非ス、自由結婚ヲ望マサルニ非ス、女權伸暢ヲ談セサルニ非ス、三從ノ教必シモ好ム所ニ非スト雖、如何セン管理者其人ト意氣相反シテ、常ニ其壓制ノ下ニ呼吸スルヲ以テ、意旨ノ如何ヲ開陳スルヿ能ハス、遂ニ才士ニ厭ハレ世ニ疎マレ、「おゝろにもあらでうき世ながらへば」ノ嘆ヲ發セシムルニ至ラン、サレハ月ノ夕、書籍ヲ繙イテハ古今東西賢婦ノ跡ヲ追想シ、花ノ晨、散歩ヲ試ミテハ、心竊ニ才士

ヲ思テ無情的翁媼ノ干渉主義ヲ詑ツナルヘシ、

正彦云、行文雄披ノ間、婉辭ヲ挿テ表面ヲ裝飾シ、讀者ヲ籠絡シ、是ニ至テ一句斷定ス、能ク千斤ヲ扛クル力アリ、茫々タル海上忽チ燈臺ヲ望ムカ如ク、眞ニ快絶ノ文字ニコソ、

アハレ此女ヲシテ意ノ欲スル所ニ從ハシメ、能之ヲ扶翼スル者アラシメハ、其精神ノ快暢ナル思想ノ優美ナル、世人羨望シテ止ムヿ能ハサルニ至ルヘシ、古典學ハ則自由教育ヲ受ケタルノ淑女ニシテ從來ノ學者其人ハ封建ノ餘光ヲ存スル翁媼ナリ、若シ翁媼一朝飜然トシテ淑女ノ爲ニ計畫スル所アラシメハ、カヽル無情ノ世界ニ彷徨セシメテ、秋夜ノ浩歎ヲ發セシムルニハ至ラサルヘシ、今ヤ翁媼適、反心シテ淑女ノ主義ヲ贊成シ、淑女ノ思想ヲ貫通セシメント欲スル者无キニシモ非スト雖、僅ニ泥中ノ玉タルノ觀ヲ免カレザルヲ以テ、猶世人ヲシテ天保娘、寛政女ノ酷評ヲ下サシメ、遂ニ古典學ハ頑陋下愚輩ノ玩弄物タルニ過キズトノ誹謗ヲ甘受セサル能

干信云、有女懷春、吉士誘之論者有焉、

秋香云、故ラニ洋文体ノ語ヲナス所、最モ妙味アリ、

ハサルニ至レリ、

正彦云、嗚呼古典學ヨ、々々、汝ハ如何ナル幸福ヲ、英雄ニ助ケラレテ、久シク固陋ノ淵ニ沈淪シ、窮危ヲ脫セントス、汝ハ如何ナル天緣ヲ、俊才ニ知ラレテ、共ニ大倭ノ山ニ咲匂フ櫻花ヲ觀ントス、千載ノ知己ニ逢フ、汝ガ

嗚呼古典學ヨ〳〵〳〵、汝ハ冤罪ヲ負テ固陋カ島ノ月ニ呻吟セリ、汝ハ罪無クシテ頑固堂ノ獄門ニ梟サレタリ、豈汝カ爲ニ一言シテ汝ガ冤罪ヲ救濟セサランヤ、豈汝カ爲ニ一臂ヲ振テ汝ヲ文明ノ域ニ出サヽランヤ、若シ今ノ時ニ當リテ汝カ冤罪ヲ雪カスンハ、千載ノ下誰カ汝カ冤罪ナリシヲ知ル者アランヤ、是余カ單身進テ其衝ニ當ル所以ナリ、何ソ帶甲百萬船艦充備ノ期ヲ俟ツノ暇アランヤ、ソモ〳〵古典學トハ往昔ノ史典遺物ヲ考究シ、之ニ憑テ邦土ノ起原ト、其沿革トヲ明カニスルノ學ナリ、猶云ハヽ、古代ノ事物ヲ考證シテ、人智ノ開明ニ赴ケル順序ヲ研究シ、其理ノ在ル所ヲ繹テ社會發達ノ一助ヲ爲スモノナリ、然ルニ從來國學者ト稱フル者ハ、啻

喜ヒ知ルヘキナリ、

秋香云、卓論、上文抑亦古典學者云々ニ應ス、

ニ詞章ノ一邊ニ偏スル歟、否ラサレハ太古ノ史典ヲノミ（古事記日本紀等ヲ云フ）玩テ進化ノ理ノ何タルヲ知ラス、所謂惟神道（カムナガラノミチ）ヲノミ無上ノモノト信シ他ニ顧ル所無キカ如シ、如此ノ徒ハ決シテ斯學ノ忠臣ニ非スシテ獅子身中ノ蟲タルニ過キサルノミ、

曩ニ東京大學ニテハ、古典講習科ヲ設置セラレテ、專斯學ノ本義ヲ講究セシメラレタリキ、余モ亦其末ニ列ルノ幸ヲ得、黽勉怠ルヿナク本學ノ振張ヲ計リ兼テ世ノ迷夢者ヲ警醒センノ志ナルカ、卒業後日猶淺ク同學ノ士未、斯學ヲ以テ世人ニ開示スル者少キヲ以テ、或云フ此レモ、亦從來ノ神學者、詠歌者連ノ相續人タルニ過キサルノミト、甚哉其誤レルヿヤ、

雖然世人ノ妄信如此ナルハ、前ニモ云フ如ク古學者自ノ招キシ所ニ原因セスンハアルヘカラス、果シテ然ラハ其論古學者ノミニ及フハ猶可ナリト雖、今ヤ延テ余輩ノ頭上ニ及ヘリ、豈默〻ニ附スヘケンヤ、何ソ決然奮起古典學ヲシテ彼、老耄前途賴ミナキノ徒ニノミ委任シ置クノ舊例ヲ廢棄シ、文明日新ノ一學科タラシムルヿヲ勉メサランヤ、古典學ヲシテ文明ノ一學科タラシメンニハ、國學者ノ陋弊ヲ一掃セスンハ能ハサルナリ、陋弊ヲ一掃センニハ其弊ノ原因ヲ考索スルノ便ナルニ如カス、何トナレハ原因既、明カナル時ハ之ヲ救濟スルモ容易ノ業タルニ過キサレハ也、依テ今一篇ノ改良論ヲ草シ、先、其陋弊ノ原因ヲ列擧シ、將ニ其方法ヲ痛論スル所アラントス、但シ淺識寡聞其是非得失如何ニ至リテハ、偏ニ大方君子ノ是正ヲ仰クト云フ、

秋香云、痛快

第二章　國學陋弊ノ原因

第一　尊内卑外ノ意ヲ誤解シ、事

尊内卑外トハ孔子春秋ヲ作ルノ大旨ニシテ當時周室衰ヘ、外諸侯強大ナルカ故ニ、世人動モスレハ我ヲ忘レテ彼ニ從フカ如キ弊アルヲ憂ヘ、中國ヲ尊ヒ夷狄ヲ卑メ、始テ尊王攘夷ト云フ事ヲ立テ、治教ノ大道トシ、華夷内外ト云フヿヲ嚴ニシ、モノニヲ、憂國ノ至情ニ發シ、モノナリ、（尊内卑外ヲ以テ孔子ノ意トスルハ非ナリトノ説モアレト今ハ普通唱フル所ニ從フ）然ルヲ後世ノ學者其意ノアル所ヲ知ラス、徒ニ内事ヲ矜誇シテ、外事ヲ輕蔑シ、其弊外國ノ事トイヘハ如何ナル美事ト雖、棄テ、顧ミサルニ至ル、コレ大ナル謬見ナリ

寛云、今人カ内外ノ辨ヲ忘テ、屈頭帖尾國辱ヲ顧ミザルモ云甲斐ナキヿナリ、サレトコハ施政上ヨリ來ルカ、學問上ヨリ起レルカ、或ハ二ツナカラ相待テ然ルニテモアラン、

凡、物ニ尊卑ノ別ヲ立ルハ、治教ノ大道ナリト雖、彼ノ長ヲ取テ我ノ短ヲ補ヒ、我ノ不善ヲ捨テ彼ノ善ヲ取ンニ、何ノ不可ナル事カアラン、啻ニ不可ナキノミナラス、如此ニシテ始テ良結果ヲ見ルヘキナリ、

國學者ノ徒、往〻此理ヲ誤解シ、外物ト云ヘハ、其良否如何ヲ考察セス、一向之ヲ厭嫌スルノ弊アリ、其意ニ云、外國ノ書ヲ讀ミ外國ノ事情ヲ明カニスル時ハ、魂海外ニ飛フノ恐レアリト、コレ猶人ノ牛肉ヲ喰フヲ見テ其人ノ牛ニ化センカト恐ルヽ者ノ如シ、杞憂モ亦甚シト云フヘシ、是ヲ以テ見解愈狹ク、其弊ヤ唯我邦ヲノミ無上ノ文明國ト信シ、敢テ他ヲ顧ミサルニ至レリ、コレ尊内卑外ノ本義ヲ誤解シヽヨリノ事ニシテ却テ外方ノ侮ヲ來タス一遠因タラサルヲ得

秋香云、此活眼アリテ後此篇アリ、由之云、尊内卑外説ノ盛ナルハ、本居平田二氏ノ時ニアリ、當時漢學者、目般周ノ跡ニ眩シ、心周公孔子ノ道ニ醉フ於是二氏其反對ニ立ナ我ヲ揚ケ彼ヲ貶シ、孔子ヲモ直ニ孔丘ト呼フニ至レルハ、物ノ勢、自然ルナリ、本居氏等豈孔子春秋ノ遺意ニ據リテ尊内卑外ノ説ヲ樹立センヤ、

又云、棄テ顧ミサルニ非ス、實ハ私ニ之ヲ淑スル也、平田氏等ノ説ニ於テ往々是ヲ見ル、英雄欺人ト云フ可シ、

ス、何トナレハカヽル淺薄ノ見ヲ懷テ傲然獨立ヲ計ラントスルハ、到底得可ラサルヿナレハナリ、嗚呼古典學ノ振ハサルハ其學ノ无用ナルニ非スシテ、學者其人ノ頑愚ナルニ因レルノミ、之ヲ頑愚ニ導キシハ尊内卑外ノ意ヲ誤解シヽニ原セズンバアルヘカラス、故ニ余ハ本條ヲ立テ斯學不振ノ一原因ト爲スナリ、

秋香云、此弊特リ國學者ノミニアラス、漢學者流ニ於テモ從前往々見ル所ナリキ、共ニ自ラ其道ノ衰頽ヲ促スモノト云フヘキノミ、

第二　傳統ヲ重スルカ爲ニ反テ學祖ノ意ヲ失シヽ事

學ニ傳統ヲ重スルヿハ東洋古來ノ習慣ニシテ、其實道德上ノ原則ニ因レルモノト雖、其弊ノ生スル所強テ先師ノ意旨ニ背戾セサランヿヲ務メ、爲ニ其學ノ範圍ヲ狹隘ナラシムルノ恐アリ、國學者ノ如キハ尤此弊多シトス、

秋香云、法官斷訟ノ言、説キ得テ分明ナリト云フヘシ、

上代ノ事ハ暫、論セス、近世荷田東滿、岡部眞淵、本居宣長、平田篤胤、

物集高見云、思ふに、古學者が、其學祖を重んずる弊、常に、學祖の眞意をあやまりて、學祖をも併せて、無識の者のやうゝ、思いしむるに至れり。世の古學者たるもの、よく、こゝに、意を用ひざるべからず

(世ニ國學ノ四大人ト云フ)等ノ碩學頻々輩出シテ、盛ニ斯學ヲ擴張セラレシ以來、有志ノ徒爭テ其門ニ就キ、各好ム所ニ隨テ修學スルヿトナレリ、是ニ於テカ學ニ傳統ヲ唱ヘ(道統ヲ唱フルヿハ吉田ト部ノ神道者流、北村季吟等ノ詠歌者連ニモアリシヿナレト夫ハ論外ナリ)甲乙ニ傳ヘ乙丙ニ傳ヘ、其末派種々アリト雖、必竟本居平田兩翁ノ流裔タラサルハ幾、希ナリ、(平田翁ハ本居翁歿後ノ門人ナリトモ、自、一機軸ヲ出シテ遂ニ一門ヲ立ルニ至レリ)如此無數ノ學者輩出シヽト雖、其言フ所各先師ノ意ヲ敷衍スルカ、否ラサレハ糟粕ヲ舐ルニ過キスシテ決然舊弊ヲ脫却シ進テ斯學擴張ノ方法ヲ談論スル者甚鮮シ、コレ他ナシ如此スル時ハ勢、先師ノ言論ヲモ難破スルヿモ有ルヘケレハ其德望ヲ欠ンノ恐アレハナリ、是ヲ以テ先師

由之云、畢竟眼孔豆ノ如ク、驥尾ニ附カサレハ行クヿ能ハサルモノナリ、

意ヲ太古史ニ注ケハ己モ亦之ヲ事トシ、先師意ヲ詞章ニ用フレハ己モ亦之ニ從ヒ、他ニ思慮スル所ナキヲ以テ反テ先師ノ德ヲ贊揚スルモノトス甚哉其誤レルヿヤ、

凡、社會ハ日ヲ逐テ新ニ、事物ハ月ニ隨テ精巧ニ赴クハ自然ノ理ナリ、試ミニ兩翁(本居平田)在世ノ時代ト今日ノ時代トヲ比較シテ考一考セヨ、當時覇府ノ威盛ニ、殆、皇權ヲ壓抑スルノ勢アリ、加之學問ト云ヘハ漢書ヲ讀ムヿトノミ心得、甚キハ彼我ノ別ヲ辨知セサルノ輩無キニシモ非サリキ、是ヲ以テ兩翁ノ唱フル所專、古典ニ憑據シテ君臣ノ大義ヲ說キ、內外彼我ノ別ヲ辨論シ、暗ニ覇府ノ專横ヲ訴フル所アルカ如シ、兩翁ノ著書ヲ讀ム者常ニ意ヲ此ニ用フヘシ、之ヲシテ悉、當今ノ用ニ供セントスルハ時勢ヲ考ヘサルヨリノ誤ナリ、且、當時書籍ニ乏ク一書ノ注釋ヲ下スダニモ容易ノ業ニハアラサリキ、コレ加茂翁ノ萬葉集ニ一生ヲ送リ、本居平田兩翁ノ太古史ニ畢生ノ力ヲ用ヒラレシ所以ナリ、蓋、其意太古史萬葉ノ一邊ニ止ルニアラスト雖、難ヲ先ニシテ易ヲ後ニシ、有限ノ人壽普、之ヲ研究スルノ暇ナキニ因レルノミ、故ニ本居翁ノ言ニ云、我ニ續テ起ラン者ハ我說ヲノミ尊信スヘカラス、自進テ一機軸ヲ出スヘシト、此心ヲ推テ之ヲ案スルニ、翁ノ精神亦太古史ノ一邊ニ止ラサリシヲ知ルヘシ、

又云、二氏

ナシテ今ニ生レシメハ、必シモ神道ヲ說カス、論者ヲシテ當時ニ在ラシメハ、先太古史ヨリ始メン、所謂易地皆然モノ也歟、

干信云、兩翁門人着眼於此其幾人、令兩翁讀之、應首肯於高天原、

又云、爲重傳統生學術衰頹、不獨古典學、中世四道之學、從立其世家、學術各

然ルヲ其門弟タルノ徒、身ハ文明日進ノ今日ニ在リナカラ、猶封建時代ノ意志ヲ懷キ、先師ノ著ヲ讀ミ、先師ノ筆ニ習ハンヿヲノミ務メテ、先師ノ精神ノ在ル所ヲ推求シテ、斯學ノ改張ヲ論スルモノ少

爲一家私有、有志之徒自忍螟蛉之耻、纔相繼其學、故口傳秘授之弊起今也政府專廢世襲之弊、廣求學、理於宇内古典學亦宜體此意也、此章論得甚適切、

ナキハ抑何ノ故ヤ、傳統ヲ重スルノ弊タルニ過キサルノミ、則先師ノ言ハサルヿヲ論スルハ反テ師ヲ貴フノ道ヲ失スルモノト自信スレハナリ、嗚呼、弟子數百人兩翁ノ忠臣タル者果シテ幾何カアル、故ニ云傳統ヲ重スルハ斯學ノ範圍ヲ狹隘ナラシムルノ媒ニシテ反テ本學ノ不振ヲ來タス一原因ナリト、

高見云、神學とは、神道の事を學ふを云ふ。されは、決して古書の上のみにあらすしにあらされはなり。

第三　神典學ヲ本トスル事

神典學トハ即、神道學ニシテ其要神代ノ事蹟ヲ知リ、惟神ノ道ヲ會得スルニアル也、(太古史ヲ指シテ神典ト云フハ彼輩ノ濫稱ニシテ、不通ノ語ナレトモ、今ハ通常唱フル所ニ從)フ、凡從來國學者ノ唱フル所、孰モ此學ヲ以テ本トセサルハナシ、其云フ所、我國ハ神國ニテ神道ト云フ大道存ス、何ソ異域ノ學ヲ要セント、是ヲ以テ其讀ム所

是れ、亦た、常に、古學者の誤まるところなり。

干信云、我邦學者未立宗教學理區別、故教學混淆而遂不能發見眞理、擴張古典學、宜先把神道放學理外也、

ノ書、專、古事記日本紀等ノ一局ニ止リ、偶、博覽ナル者アルモ、所謂神道家ノ僻眼ヲ以テ之ヲ窺ヒタルニ過キサレハ、神道ニ叶ハサル所ハ更ニ心ヲ用ヒス、專、其道ニ引付ケ時世ヲ褒貶シ人ニモ教授スルヿナレハ、到底井蛙ノ見タルヲ免レサルナリ、

凡道理ハ事實ニ憑テ證明セラル、モノナリ、事實外ニ道理有ルヘカラス、而ルヲ初メヨリ神道ト云フ原則ヲ設ケ、所謂演繹論理ノ一方ノミヲ推及シテ之ニ背戻スルモノハ悉、邪道也トシテ研究シタランニハ充棟、汗牛ノ書籍ヲ讀ミタリトモ、猶神道者ノ博覽タル者ニシテ到底眞理ヲ發見スルヿ能ハサルナリ、眞理ヲ發見スルヿ能ハサル物何ソ斯學ニ預ランヤ、故ニ余ハ神典學ヲ本トスルヲ以テ本學衰頽ノ一原因トナス也

秋香云、快論實ニ古典學者ノミニアラス、歌學者ノ爲ニモ亦一大針砭ト云ツヘシ、由之云、從來ノ勢ハ、政体風俗等ヲ研クトモ、ソレニテハ、人々尊信セス、歌文ニテモ心得居レハ、東家ノ隱居、西隣ノ息子モ、めてたし、をかしノ評點ニテ、潤筆ヲ送ルヿナレハ、ソレニテ口ヲ糊スル助ケトモナリシモノナリ、眞ニ悲ムヘキコトナレド、獨學者ノミヲ咎ムル可ラサル事情モアルヘシ、

干信云、詠歌之事、後有歌論、故不評于此、

正彦云、此章陋弊ノ原因ヲ講スルヿ頗ル精シ、サレト猶案スルニ其他ノ遠因無ニシモ非ス、第一、東西ノ學問其方法ヲ異ニスルヿ、本邦及支那從

第四　詠歌ヲ以テ國學者ノ本分ト心得ル

歌ハモト事ニ觸レ物ニ接シテ自然ト言ヒ出セル詞章ニシテ、古代ノ風俗ヲ考ヘ、古人ノ思想ヲ索ルニハ頗有用ノモノナリト雖、之ヲ詠スルヲ以テ古典學ノ本分トスルハ大ナル謬見ト云ハスンハアル可ラス、國學者ノ輩動モスレハ此理ヲ誤リ、歌ヲ詠スルヿ能ハスンハ古典學者ニハ非ル者トノ考案ヲ懷クモノ少カラス、是ヲ以テ漸、古今ノ口調ニ擬ヲ、萬葉風ノ何タルヲ知ルニ至レハ、則自揚々國學者ヲ以テ任シ、古代ノ政體如何ト問ヘモ答フルヿ能ハス、古代ノ風俗如何ヲ問ヘモ知ルヿ能ハス、只數千年以來陳腐ノ設題ニ基キ三十一文字ヲ並列スルヲ以テ足レリトナシ、今ハ跡方モナキ延喜時代ノ名所等ヲ其儘ニ詠ミナシ、「歌よみは坐して天下の名所を知る」ナト、高慢自居リ、風流雅士ヲ以テ自任スト雖、其實柔懦蕩子タルニ過キサルナリ、コレ古來經驗上明瞭ナル事實ニシテ詠歌ヲ以テ古典學者ノ本分ト心得シヨリノ弊ナリケリ、

柔惰蕩子ハ學者社會ニ無用ノモノナリ無用ノ人ニシテ有用ノ古典學ヲ修メントスルハ理論上行ハル可カラサルヿト云ヘシ、故ニ云フ詠歌ヲ以テ國學者ノ本分トスルハ、本學陋弊ノ一原因ナリト、國學陋弊ノ原因多シト雖、以上ノ四ケ條ヲ以テ尤重大ノ件トスヘシ、余ハ更ニ改良方案ヲ陳ヘテ本學將來救濟ノ方法ヲ論スル所アラントス、

第三章　國學改良方案

第一　歷史學ト言語學トヲ分ツヘキ事

來ノ學術ハ、所謂篤ク信シテ而後學フ者ニテ、專ラ演繹推理ヲ主トスルカ故ニ、マヽ偏見辟説ニ陷リ、遂ニ固陋ノ種子ヲ養成シ、守舊ノ遠因ヲ爲セリ、是レ國學ノミナラス漢學ノ如ハ最多キ所ナリ、第二、發明説ヲ秘シタル事、近古ノ著ヲ通觀スルニ、口傳秘訣ト稱シ、人ニ知ラシメス、或ハ傳授料ヲ貪ノ奸策アルニ因レト、概

本案ヲ述ルニ付テハ先、古典學ノ釋義ヲ下スヲ要スヘシ、古典學トハ歷史學ト言語學トヲ總括シタルノ名目ニシテ則太古以來有形無形ニ拘ラス、アラユル事物（典籍、言語、地理、動植、器具等）ヲ考證シテ眞理ヲ發見スルノ學ナリ、是ヲ以テ其範圍頗、廣ク、初學ノ徒準的ニ惑フ者多シ、故ニ先輩ノ此學ヲ教授セラルヽヤ、或、神典、歷史辭章、トナシ、或國史實錄、律令典、故、古言、トナシ、或、神學事實學、歌學、トナシ、或古語、神典、歷史、典故、詞藻、トナス、而テ其之ヲ授ルヤ、或、之ヲ兼修シ、或、之ヲ專修セシムト雖、是等ハ孰モ古典學內部中ノ小分類ニ過キスシテ且不完全ノ責ヲ免カレサルナリ、故ニ余ハ古典學ヲ大別シテ歷史言語ノ二科トナシ、各其器ニ隨テ專修セシメン、ト欲スルナリ、何トナレハ博ニ失シテ淺カランヨリ寧、狹キニ失ス

ヲ自己ノ發明説新考案ハ多クハ之ヲ秘シテ容易ニ敎示セサル弊アリ、是レ實ニ斯學ヲ狹隘ナラシメシ者ナリト云フヘシ

又云、第三章古典學ノ釋義、簡ニシテ盡セリ、

秋香云、着實ノ論感服々々

トモ深クシテ精シカランニ如カサレハナリ、

歷史學トハ何ソヤ、曰、上古以來歷朝ノ事實ヲ考究シ原因結果ノ理ヲ明カニシ之ヲ今世ノ事ニ參考シテ社會發達ノ方向ヲ照導スルノ學ナリ、此學ヲ講究スルニハ啻ニ史典ノミニ止ラス、或地理ニ據リ或、古器物等ニ參考セスンハアルヘカラス、又其活用力ヲ與フルタメニ各國ノ歷史ハ更ナリ、哲學、社會學、古物學、人種學、心理學、論理學等ノ一端ヲモ知ラスンハアルヘカラサル也、

言語學トハ何ソヤ、曰、古人ノ言詞及ヒ其語原ヲ考究シテ上代開否ノ狀ヲ知リ、或、文章ノ意味情趣ヲ明カニシテ變化活用セル所以ノ理ヲ考ヘ、或、字音ノ轉用ヲ考ヘテ漢吳ノ兩音ヲ辨ヘ、或、今日ノ俗語ヲ考究シテ上代ノ語法ヲ發見スル等ノ方法ヲ務ルノ學ナリ、此學

ヲナスニハ各國ノ文典ハ更ナリ、博言學、論理學、人種學、修辭學、等ノ一端ヲ知ラスンハアル可ラサルナリ、

以上ノ二科ハ古典學ノ大綱ヲ分ケタルモノニシテ其目ニ至リテハ二科各幾多ノ小分類ヲ要スル亦也、而テ之ヲ學ハン者ハ決シテ古人ノ餘涎ノミニ甘ンセス、自、一機軸ヲ出サン心得ニテアルヘシ、且、參考書タル西洋ノ諸學科ハ原書ヲ讀ム能ハサル者ハ、譯書ニテモ可ナリトス、譯書ハ分ラヌモノトテ拋擲スヘカラサル也、

高見云、余、常に、和漢學をかこさんとならい、先つ其教授法より改めさる可らずと思へり、今此篇を讀ミて、其同意者ありしをよろこぶなり。

第二　學生ノ資格ヲ預定シ及ヒ教授法ヲ改正スヘキ事

古典學者ヲ養成スルニ豫メ其資格ヲ定メ置クヿハ頗、要用ノ事ニシテ識見ヲ高シ正當ノ針路ヲ得ルノ一大進歩タルヘキナリ、何トナレハ古典學ハ完全ナル學科ヲ成シタル者ニアラサレハ、文字ノ荒野ヲ跋陟シ言語ノ沙漠ヲ渉獵シテ漸、其神髄ヲ得ルニ至ルモノナレハ一通、普通學科ヲ修メタル者ニ非レハ大ニ惑フ所多ケレハナリ、故ニ余ハ此學生タラン者ヲシテ尋常中學卒業生カ、否ラサレハ之ニ准フ學識ヲ有スル者タラシメント欲スルナリ、

秋香云、活潑ノ論、此着眼アリテ後讀書初メテ用ヲ爲スヘシ、

教授ノ方法モ從來ノ如ク一字一句ノ上ノミニ止ラス、歴史科ニテ之ヲ云ハヽ、佛法ノ渡來ハ如何ナル原因アリヤ、大化ノ改新ハ如何ナル結果ヲ與ヘタルヤ等ノ理ヲ明ラメ、又言語科ニテ云ハヽ、假令ハ古今ノ言語ノ數ヲ比較シテ世ノ開否ヲ知リ、或、古今ノ文章ヲ解剖シテ其沿革セル所以ノ理ヲ考ヘ、啻ニ活働法、及ヒ難語等ヲ解スルノミヲ以テ足レリトセス、專、當今ニ應用スルノ方法ヲ研究セシムヘシ、

千信云、初則罵詈激言、突如而至、守舊頑固者畏縮落膽、將掩頭却走、而至此懇諭款說、以委授方法、却走者忽廻步東、喜乞教、不知論者辨術從何處得來、余恐論者揷此術、誘彼淑女越墻而奔西洋、

如此、學ニ順序法則ヲ立テ、之ヲ教導スル時ハ、五年ニシテ得ン所ノ功ハ二年半ニシテ之ヲ得ヘク十年ノ功ハ五年ニシテ之ヲ得ヘシ、然ラハ普通學ニテ無用ノ年月ヲ費スカ如クナレモ、從來ノ半ケ年ニシテ其業ヲ卒レルヿトスレハ、相平均シテ聊不都合ナカルヘシ、啻ニ不都合ナキノミナラス、普通學ニテ得シ所ノ力ハ皆斯學ノ援兵ト爲リテ、不羈獨立始テ敵營ニ對シテモ恐レサル一ノ堅牢ナル古典學城ヲ築キ、日章ノ國旗ヲ飜シテ衆軍ニ餘勇ヲ示スニ至ルヘキ也、

第三　神道家詠歌黨ニ國學者ノ名ヲ附ス可ラサル事

余ノ此ニ云フ神道家トハ、神學ニノミ依賴シテ世ヲ渡ラントスル者ニテ俗ニ云フ高天原連（タカマノハラレン）ナリ、詠歌黨トハ歌ヲ詠スルヿヲノミ目的トスル者ニテ俗ニ所謂ほの〻黨ナリ、前ニモ云ヒシカ如ク、國學者ノ名稱ヲ濫用シテ爲ニ斯學ニ寃罪ヲ蒙ラシメタルハ、多クハ此兩流者ニアルヿニテ名稱濫用ノ罪一歩モ辭セシム可ラス、嗚呼高天原連ハ古典學ヲシテ奇々怪々解スヘカラサル界ニ陷ラシメタリ、嗚呼ほの〻黨ハ古典學ヲシテ柔惰世界ニ旅行セシメタリ、故ニ今日ニ當リテ斯學ヲ發揮シ斯學ヲ擴張センニハ、此兩流者カ貴重ナル國學ノ名稱ヲ濫用スルノ弊ヲ除カサルヘカラス、何トナレハ神道ヲ說テ人ニモ教ヘ我モ信スルハ宗教上ノ事ニシテ國學者ノ事業ニ非ス又歌ヲ詠シテ思想ノ美ヲ鬪ハシムルハ美術上ニ屬スヘキ事ニシテ自、古典學トハ性質ヲ異ニスルモノナレハ也、

秋香云、快刀斷絲ノ文說得ヲ朋晰、

千信云、以神道屬宗教、以詠歌屬美術、而古典學者經界始整然、以之進修則

凡、學科ハ其性質ニ依テ夫々分類スヘキ物ナルニ、カヽル異種ノ物

得良果於天下、爲稗益於社會也明矣、論者改弊之功、於是乎在焉、

ヲシテ此ノ學科中ニ混交セシムルハ大ニ學事上ノ進歩ヲ害スルモノナリ既、混交物タル「明カニ、其進歩ヲ害スル」多シトスル時ハ、速ニ之カ經界ヲ立ツヘキ也、故ニ余ハ此ノ兩流者ヲシテ國學者ノ名稱ヲ剝奪シ(宗教家詠歌師等ノ名目ヲ附シテ可ナラン)斯學ノ範圍ヲ脫セシムルモ、亦改良ノ一法タルヘキモノト信スルナリ、

以上ノ方案ヲ實施スル時ハ、第一ニハ斯學陋弊ノ諸原因ヲ救濟シ第二ニハ斯學ノ眞光ヲ發揮スル一大針路ヲ開クヘキ也、世間有志ノ士、斯學ノ不振ヲ憤リテ空ク憂ニ沈マス、決然唾手各進取ノ策ヲ講セハ啻ニ斯學ノ寃ヲ雪クノミナラス國家文明ノ稗補ヲ爲スヿ豈、少々ナランヤ、

以上國學ト云ヒ古典學ト云ヒテ共ニ同一ノ意ヲ以テ之ヲ論シタルハ、暫、普通唱フル所ニ從ヒタル者ナリ、蓋、世間イマタ古典學ト國學トハ異名同體ノ者トノミ思ヒ居ル人多カルヘシ、依テ更ニ古典學ノ名義ヲ記シテ本論ノ附錄トス、看ン人能、其異同如何ヲ辨識セラレナハ幸甚、

古典學名義

古典學トハ先年東京大學ニ於テ始テ命セラレシ者ニシテ從前ハ此名ハ無リシナリ、德川氏ノ初メ、林春齋ハ和學ト云ヒ、荷田在滿氏ハ國學ト云ヒ、本居宣長氏等ハ古學ト云ヒ、或、皇學トモ唱ヘ、近來ハ皇典學ト云フモアリ、是等ハ孰モ穩當ナル字面ニ非スシテ且斯學ノ性質ヲ表明スルニ足ラサルモノ也、何トナレハ凡、學問ハ古今ニ通シ萬國ニ亘リテ道理ヲ研究スルヲ目的トスルモノニシテ、一國一

州土ノ私有物ニ非レハナリ、雖然カヽル名稱ヲ斯學ニ付シタルハ、必竟文學未開ケス、且當時專流行シヽ漢學ニ對シテノ意地張ト聞ユレハ今ヨリ之ヲ咎メンモ大人氣ナシ、余ハ此ノ厭フヘキ舊世界ヲ去テ一鞭直チニ古典學ノ自由境裏ニ驅入ント欲スル者ナリ、

古典トハ古ハ既往ノ義ニシテ邦語ニ所謂イニシヘ（去ニシ方）ナリ、文選ノ薛注ニ古往也トイヘリ、卽太古ヨリ近世マテノコト也、典ハ典則常例ニテ典故慣例ナト云フ義、書ノ西伯戡黎篇ニ殷紂カ典故慣例ニヨラス心ノ儘ニ法度ヲ立テタル所ニ、不迪率典トアリテ注ニ典ハ常法也トアル典ノ字ノ意ナリ、即、古典學ハ既往ノ典例ニ明徵シテ後來ノ事宜ヲ爲スモノ故ニ古典學トハ云フナリ、若シ典ヲ典籍ノ典ト思ヒ、徒ニ古書ヲ繙弄スルノ學ト思フ者アラハ大ニ誤レリ故ニ唯上古ノ書籍ノミヲ讀ミテ神世ノ奇異譚ヲ誇張シ、唯、歌集物語等ヲ玩テ詠歌ノ雅俗ヲ爭フ者ノ如キハ決シテ古典學者ニハアラサルナリ、

物集高見云余は、此全篇を、廣く、世上に出たすよりも、先ず、古學者、神道者、詠歌者、語學者、などより讀ましめ、さて、

中村秋香云余曾て世の國學者流の只管神典を遵奉し師傳を墨守して今世の事物に應するの道を講せす歌文學者の大概萬葉古今乃詞藻に心醉し勢語源譚の範圍を徘徊して今日の景情を述ふる其途を求めさるを歎し之を目して偶像精神の學者と稱したること とありき今此篇を讀むに萬古不易の公論覺らす人をして拍案快と呼はしむ乃ち余か彼れ所謂偶像精神なるもの、歎ぶ不言のう

ち既く氷解して復〻痕跡を留めず加之豪宕の文氣牛を呑み有爲の才幹掩ふへからざるものあり余將に刮目して革弊奏功の日を竢さんとす

雨宮千信云、此論一篇、激論慨說、革古來流弊、回後來進步、我邦文學上、大關係之文、願早發之爲天下公論、

丸山正彥云、全篇議論簡明ニシテ着々其緊ニ當リ、復一言ノ贅スヘキ者無シト雖、余ハ改良方案中ニ、公平ニ批評スル事ト云フ一項ヲ加ヘ度思フ也、批評ノ學術上ニ有益ナルヿハ固ヨリ論ヲ俟タサレモ、從來本邦ノ學者ハ見識定說アリテ能ク批評シ得ル人甚鮮シ、表面ニテ其人其著述ニ對テハ、めてたし、よろし、をかし、めつらし、おもしろし等類ニ賞贊スレトモ、裏面ニテハ罵詈讒誣口ヲ絶タス、其陋眞ニ厭フ可シ、冀クハ此弊ヲ一洗シ、詔フヿナク憚ルヿナク、論難辨駁公平ニ批評セハ、大ニ眞理ヲ發見シ、古典學ノ進步ヲ來スニ足ラン、兄以テ如何トナス、

○和歌改良論

萩野由之著

貞觀延喜ノ際國史ノ撰修亡ヒテ、歌集ノ勅撰作リシハ、詩亡然後春秋作トイフニハ反對セリ、世ニハ當時ヲ太平極治トイヘモ、極治ハ即衰兆ナリ、定メシ式條モ其通ニハ行ハレス、後年政權武人ノ手ニ墮ケシヿ早ク此時ヨリ萌シ、公卿ハタヽ歌ヲ以テ今日ノ務トスルアリサマナリ、サレハ、朝廷ノ政歷史ニ書クヘキ程ノ事モナク、又書キテ、却テ王室ノ衰微、公卿ノ惰弱ナル情態ヲ世ニ傳ヘラレンヿ、心憂シトノ趣モヤアリケン、史撰ムヘキホトノ學士ハ多カル時ナレトモ、一向ニ其沙汰ハナクテ、歌集ノ勅撰ト云フヿ始マレリトミエタリ

小中村清矩曰、史に載る成蹟なかりしおらん、然れい心憂しと云々の説い、雜記上に就て云ふへし、公卿惰弱の態おと、素より朝廷の史より載すへきよあらさるをや、又曰、勅撰歌集の起は、以

サテ古今集ノ序ニハ、力をも入れすして、天地を動かし、目に見えぬ鬼神をも、哀とおもたせ、男女ノ中をも和け、猛き武夫の心をも慰

前一旦衰へたる歌道の、延喜の頃再興になりたる時勢もあり、且い假字を用ゐて、歌も端書をも記す便利もあり、又い假名文始て興りたる珍らしき事もあり、かたく原因い一ならさるへし

干信曰、當時有鬪歌致死者、有祈句犧身者、朝廷徒有美術上忠臣、無政治上義士、是所以大權去移武門也、論者論和歌、先著眼

むるは歌なりと書キ、新古今集の序ニハ、歌は色に耽り、心をも舒ふる媒とし、世を治め、民を和くる道とせり、風雅集ノ序ニハ、倭歌は中略まことに人の心を正しつへし、下を教へ、上を諫む、即政の本となるナト書ケリ、サラハ此時ハ、上下和順シテ、太平ノ化雍々乎タリ、皇々如タル歟ト思フニ、豈圖ラン、京師ニハ盜賊横行シ、地方ニハ豪族莊園ヲ占領シテ、朝廷手ヲ措ク處モナク、撿非違使ノ禁色（キンシキ服色）ノ身分ニヨリテ、禁制アルモノヲ禁色トイフ、）犯セル女ヲ糾シケルニ、大空にてるひの色をゝさえては、天か下には誰のすむへきと詠ミケレハ、優キ心ナリトテ科ユルシ、（新古今集ニ見エタリ）大隅守櫻島忠信カ、郡司ノ罪アルヲ召シ勘ヘントシ、時、郡司年老ヒテ頭白キ翁ナリケルカ、老はてゝ雪ゝ山をゝいたゝけと、しもとみるにそ身のひはまけるトヨミケレハ、罪赦シ

大勢、可謂卓見、

高見曰、王政の衰へたるも、實に偶然の事わわらさるあり

ケルホトノ有樣ナリ、（拾遺集、奥義抄、宇治拾遺物語ナトニ出ツ、）人ヲ感セシムルカ、歌ノ德トハイヘ、人心ヲ正シツヘキ歌ニヨリテ、却テ法紀ヲモ解キ初シテ憐ムヘキ限リナラスヤ、

徳川家康カ、公家法度十七條ヲ定メシ中ニ、和歌自光孝天皇絶雖爲綺語我國習俗也不可棄置云々、所載禁秘抄、御習學專要候事ト、順德院ノ言ヲ引キテ立テタルハ、花鳥風月ニ心ヲ蕩サシメテ政事ニ關與スルノ暇ナカラシメ、畢竟歌ヲ以テ朝廷ヲ愚ニセントスル、政略ノ一端トハ知ラレタリ、此ヲ以テ、近キ比英明ノ聞エアリシ、後光明天皇ハ、和歌物語ハ、風俗ヲ壞リ、世ヲ亂ス基ナレハトテ、ソノ書ヲハ御側ニモ近ツケタマハス、源氏繪カキシ御調度サヘ、却ケタマヒシト語リ傳ヘタリ、深キ御志ノ程、有難キフナルヘ

正彦曰、家康ノ策迂ニ似テ却テ巧ナル處、訐摘シ得テ快甚シ、中古藤原氏ノ盛ナル時、帝室ヲシテ佛ニ歸依シ、現世ノ嗜好ヲ減セシメテ、而シテ己自威ヲ逞フセリ、家康蓋此故智ニ倣フ、

シ平維章氏カ説ニ、アヽ世ノ和學者ト呼ハル、人、高天原ノ穿鑿ヲ捨テヽ、文武帝ヨリ後三條帝マテノ有サマヲ見ヨ、其盛ナル恐ラクハ、唐土ノ帝道ニモ耻ツヘカラス、其衰ハ延喜ノ比ヨリ、アマリ和歌ニ耽ラレテ、一條帝ノ比ハ、女ノ如ク惰弱ニナリ、終ニ保元ノミタレモ起リシカハ、承久建武ヲ經テ、和歌ハ公家ノ翫ヒト、願ノ如クナリシモナカシ、我日本ノ和歌ノ道カ、我日本ヲカキ亂シタルモ文武帝ノ御掟ヲ忘レ玉ヒシニヨル事ソカシトイヘリ、

干信曰、贏政燒書愚黔首、家康勸歌愚朝紳、英雄策略千古一轍、然贏政破古例、家康仍舊貫而行之、是所以彼亡而此興也、但朝廷爲是不得志三百年、洵可悲哉、

清矩曰、平維章の文、いひさまよろしからさるこヽちす、

古典學ハ、吾邦古來ノ事物ヲ繹ネ、沿革ノ理ヲ究メテ、政治ニモ學理ニモ、資益スヘキ學問ナルニ、世ニハ此ニ注意スル人少キ也タマ〳〵國學者ト稱スル人々ハ、縣居鈴屋二老ノ唾餘ヲ嘗メテ、歌調ノ新古ヲ爭フカ、サナクハ神代卷ノ註解ニ勞スルノミナリ、二老ハ歌モ高手ナレト、本領ハ歌ニアラスシテ、歷史制度ニアルヿヲ知ラテヤアルラン、其門流ノ人ト稱シナカラ、ホノ〳〵ト明石ノ浦ニ彷徨ヒ、鳧鴨（ケリカモ）ノ群ニ浮カレテ、自滿足スルハ、心アル人ノ片腹イタキノミカハ、二老モ所謂高天原ニテ、口惜クヤ思フラン、二老ノ時ハ我ト競走スルモノハ、漢學ノミナリキ、今ハ高尙ナル歐米ノ諸學科アリ、コレト進歩ヲ競ハン事、難キカ中ノ難キ也、外人ノ吾古史ヲ讀ムモノヽ中ニハ、其破綻ヲ撿出シテ、恐レ多クモ、皇統紀元等ヲモ疑フモノアリ、又政府ニ於テ、法律ヲ立テ、憲法ヲ定メンニモ、基本ハ我邦古來ノ制度慣例ナルニ、其肝心ナル基本ヲ調査スヘキ書未備ハラス、古典學ノ不進ハ、政治上ニモ學問上ニモ大厄ナリ、コノ厄ハ歷史ノ修撰亡ヒテ、歌集作リ學者末技ニ溺レテ、本ヲ捨テタル過ナリ、委キヿハ

干信曰、末派偏辟、以忘其本、此獘不獨古典學、宗教以下皆然、非有力者、別出一機軸、則其弊不可得而矯也、古典學興起、余竊有望論者焉、

余カ古典學臆議、第二篇第一章、第四篇第三章ニイヘリ、就テ見ルヘシ、今ハ一日モ忽ニセス、速ニ本源ナル歴史制度ノ上ニ遡リテ、大厄ヲ救ハヽ、イカハカリカ、世ノ裨益トナルヘキニ、題詠ノ少シモ讀ミ得レハ、先雜誌ニ投シテ、掲載シタカル世ノ中ナレハ、氣ノ注カヌモ道理ナル哉、

歌ノ流弊ヲ論スレハ、右ノ如シトイヘトモ、抑歌ノ目的ハ、人ノ性情ヲ調和スルニハ、格別ノ功能ヲ有スルモノナリ、人ノ心ノ事ニフレテ、喜怒哀樂ノ種々ニ變動スルヿハ、古モ今モ變ルヿナシ、然ルニ心ノ感動ヲ起サシムル事物ト、感シテ外ニ發スル詞トハ、時世ニ連レテ異ル、故ニ古事記ノ歌ニハ、古事記時代ノ事物ト詞トアリ、萬葉集ニハ萬葉時代ノ事物ト詞トアリ、タヽ吾邦ノミナラス、支那ノ古歌ニモ、西洋ノ古詩ニモ、皆自其事物ト詞トアルナリ、故ニ詩經ヲ

正彥曰、和歌ノ弊ヲ罵リ盡クシテ、一轉其德ヲ稱揚ス、擒縱自在、人ヲシテ瞠若タラシム、

讀ミテ、多ク鳥獸草木ノ名ヲ識ルトイヒ、法馬ノ詩ヲ讀メハ、古代ノ歴史ヲ知ルトイヘル、是皆當時ノ事物ト詞トナルカ爲ナリ、サレハ、今ノ事物ニヨリテ、感動セシ情ハ、今ノ詞ニテ述フヘキ道理ナリ、此道理ヲ推シ考ヘテ、陋習ヲ破リ、新面目ヲ開クヿヲ勤ムヘシ、サスレハ、歌モ眞ノ有用ノモノトナルナリ、太宰氏ノ獨語ニ曰ク、古人ノ能キ歌トイフハ、一度聞ケハ則耳ニ留マリテ忘レス、其意モ人ノ說ヲ待タスシテ知ラル、假初ニ唯吟スル時ハ、左ノミヲカシキヿモナキ樣ニテ、諷詠玩味スレハ、限リナキ興致アリ、今ノ人ノ歌ハ、詞六ケ敷テ、再三聞キテモ、耳ヲ過クレハ則忘ル、知ル人ノ解說ヲ聞キテモ、其意通シ難シ、歌ノ能キ惡キ、是ニテモ知ルヘシ、古人ノ詩ハ、必實況ニ對シ、實事有ッテ、淸興ヨリ出ル、故ニ其意皆實ナリ、後世

ノ詩ハ題ヲ設ケテ作ル、故ニ其意多クハ虚偽ナリ、是ヲ無病呻吟トイフ、呻吟ハオメクナリ、和歌モ古ノ人皆、實意ニテ讀メリ、後世ハ題ヲ設ケテ讀ム、故ニ多クハ虚偽ノ詞ナリ、しら〳〵しらけたる夜れ月影に、雪踏分けて梅の花折るトイフ　コソイト面白ケレ、實境ニ對シテヨメル歌ハ、皆々斯ノ如シ、僅ニ唱ヘ出ルヲハ、則其時ノ事想像セラル、和歌ノ妙ナリ、天地ヲ動シ、鬼神ヲ感セシムル事、此境ニアリ、今ノ歌ハ知ラスト、ソレ虚偽ハ勿論、實境ニ對シテ實情ヲ讀ミ出テンニモ、今ノ詞ヲ用ヰス、古言ヲ用ヰナハ、其歌ハ古人ノ耳ヲ借ラサレハ、遂ニ用ヲナサス、斯テハ歌ノ効安ニカアラン、古體ノ臧否以テ見ルヘシ、

（歌題）歌ハ、題詠ニナリテヨリ品下リシハ勿論ナリ、サレトモ初ハ題詩、朝士應制之作、概無足見者、而野客間適遣愁之詞、却多感人者、本邦和歌之衰、始于題詠、亦爲是也、袁枚不作次韻之詩、可謂卓識矣

千信曰、古來

詠ヨリ入ランモ、一ノ方便ナリ、但類題集ノ舊窠ヲ脫シテ、現ニ耳目ニ觸ル、事物ヲ重ニスヘシ、假令ハ上野公園ノ遊覽、共進會ノ盛況、不忍池ノ競馬、隅田川ノ競漕會、或又觀兵式ノ盛儀、元朝ノ參賀、書生ノ運動會ナトノ類、成ルヘク、今人ノ感觸ニ近キモノヲ以ス、カレハ、後世ヨリモ、大ニ古忍フ材料トナルヘシ、サテ又事ニ觸レテ、今古ノ感アルトキハ、詠史ノ題、即神武天皇ノ東征、倭武尊蝦夷ヲ擊ツ、一谷合戰、大塔宮熊野落、川中島戰爭、又ハ古今ノ英豪孝子義人節婦ノ事ヲモ、類ニフレテ作ラハ、感情ヲ詠スル歌ノ階梯ノミナラス、旁以テ學問ノ資トナリ、識見ヲモ長スル利益アルヘシ、コレモ短歌ノミニテハ窮屈ナル故ニ、長歌ヲモ雜ヘ作ラハ、歡暢トナリ悲壯トナリ、慷慨トナリ、大ニ舊習ノ陋ヲ一洗スヘシ、雪月花ノ景物ハ、固ヨ

栗田寛曰、詠歌者流、最應ニ着眼スヘシ、清矩曰、景物の題詠ハ、おのれか心をさなからよむ事は少くして新に題につきたる心をまうけ

てよむ事也、それも題と詞とに定りなれい、其範圍を脱せそして新らしき心をさうくる事い、きい先たる宗匠熟練の人にはらされはいとかたしされは會席に臨みて諸人の歌をみるに、一題の内大かたい同し心同し詞のみにしてそつらしきい少き也、本文に窮屈といふい、かゝる事をいへるなら ん、詩よも題詠なれど、其

リ感情ノ材料トナルモノナレト、兎ニ角、類題集ノ窠臼ヲ脱シ去ルヘシ、カノ歌題ハ、甚瑣細ノ分界ヲ立テ、窮屈ニスルカ故ニ、意モ詞モ自在ナルヿ能ハス、概千首一轍ナリ、人ノ言ハヌヿ言ハントスレハ、纖巧理窟ニ墜チテ、風雅ノ旨ヲ失ヘリ、故ニ心アル人ハミナ去テ詩ヲ學フ、服部南郭太宰春臺ノ如キ、詩文ノ傑者モ、歌ヨリ詩ニ轉シタルモノナリ、詩モ自獘ハアレトモ、兎ニ角窮屈ナラスシテ、思フヿヲ十分ニ言ヒ得レハナリ、吾國風ノ口スサミ易キヲ措キテ、韻字平仄ムツカシキ唐歌ニ轉スル、其心マタ憐ムヘキヿナラスヤ、

(歌格)萬葉以上ニハ長歌多キニ、古今以下ハ短歌ノ十カ一ニモ足ラス人ノ心ノ働キハ千變萬化スヘシ、イツモ三十一字ニテ賄ハルヘキニハアラス、其意境ニ應シテ、長歌トモ短歌トモナルヘシ、句ハ必

物よりて、おのれか眞心をいふ事は、初學の者たりともよくするあり、これ短歌は僅に三十一言にして、元來言ひたらぬ上に、言詞の制限ある故にやあらん、さりとて、今世は、題詠よりあらされい、歌道に入かたきにより、それをあしといふよりあらねど、願いくはひとゝたり通常の題をよミ給て、やハ詞つかひをさとりあ

シモ五七五七ニ限ルヿ可ラス、上古ノ歌ニ長短均シカラサル句アルハ、却テ天眞ヲ見ル處アリ、歌格ノ事ハ最思慮スヘキナリ、屋代弘賢氏ノヨマレシ烈婦假字略頌、安藤爲章氏ノ西山ノ賦ナト、一種ノ創体ナレハ、一ツノ參考トハナリヌヘシ、

(歌調)歌ハ戀ヲ主トシテ、物ハ哀レヲ知ルト云フヲ口實ニスルハ、甚宜シカラヌヿナリ、物ノ哀レハ怯懦ノ風ヲ導ク本ニシテ、歌調ノ快活ナラサルハ、重ニ物ノ哀レヲ主トスルヨリ來ルヿアリ、カノ新體詩ヲ看ヨ、有名ナル學士ノ製作トハ云ヘ、詞ノアマリ厖雜ナルニモ拘ハラス、一時海内ニ流傳シ、忝クモ天聽ニ達シテ、軍樂譜中ニモ數マヘラレシモノアリトイフ、畢竟歌調ノ快活ニシテ、勇壯ノ氣象ヲ振作スルニヨキカ故ナルヘシ、顧ルニ世ノ歌人ハ、鬚眉イカメシ

は、別に新題をまうけて、おのれかまこゝろを、うたひ出るやうに、ありたきもの也、

高見曰、歌學上の改正い、予か常に、希望する事なり。然れども、余い、三十一字のもののみをもて、歌なりとい思はす。

干信曰、古今以下長歌、駢五麗七、有華無實、猶彼六朝之文、讀之不嘔吐則幸矣、後世賀茂氏等、雖奮然執韓愈起八代之勞、其門流却招王李飣餖之弊、終失其眞、與復讎者之子妄殺人一般、眞可嘆也、

キ男子ニテモ、月ヲ見テハ歎キ、蟲ヲ聞キテハ悲ミ、春ノ晨、秋ノ夕、物事ニツケテ涙ヲ墮ス、之ヲ却テヨキヿトナス也、カヽレハ日本國人カ古來尙武ノ氣象ハユク〳〵消滅シ、大八洲ヲ擧ケテ、手弱キ女子ノ殖民地トナラントスヘシ、延喜以後ノ有サマ其鑑遠カラス、アナカシコ歌人ハ警戒スヘキヿナリ、

（歌材）名所ハ、大方古人羈旅ノ思ヒ、逍遙ノ眺メナトハカナキ事ニツケテ、ニ詠ミタル處ナリ、故ニ名所ノ名ハ、其人ト歌トニ由リテ世ニ傳ハルナリ、悉ク風景ノ勝レタルニモアラス、且桑滄ノ變化ハ世ノ常ナリ、阿古屋ノ松尋ヲ得サリシニアラスヤ、況ンヤ時勢ノ變遷ニ至リテハ、萬葉集ニ、家にあれい笥にもる飯を草枕、旅にしあれも椎の葉よもるトイヘルヲ、嘉永中某卿關東下向ノ時、君か代は驛（ウマヤ）

清矩曰、今い居あから、歐羅巴阿米利加の名所を知る人多し、今その歌も世に顯はるべし、

々ゝ旅寐をして草の枕もあらて來ゝけりトヨメリ、實ニ斯アルヘキ理ナリ、然ルニ、世には時ノ變遷、地ノ有無ニモ頓着セス、名所ノ何ナトヨメルハ、何（イカ）ナル心ソヤ、歌ノ主トスル感情ハ、誠ナラデハ起ルヘケンヤ、誠ニ情景ヲ寫スキハ、歴史の緯トモナリテ、トリ〳〵妙ナルヲ關守ノ荒キ詞聞カヌ御代ニ、函根荒井ノ關ナト過キタルヤウニ、言ヒナシ、足國ヲ出スシテ須磨明石ノ月モ見ツル如ク言ヒナス、是世ヲ欺キ自誣フト云フヘシ、能因法師カ白河ノ關ノ歌ヨミテ、己カ面曬セリト云ハ、愚ナルヿノ如クナレト、當時ノ人ノ心ハ尙斯クコソアリケレ、又郭公ヲヨメル類、京都ニテハタマニ聞クモノトイヘハ、珍ラシクテ待タルヽモ理ナリ、サレト處ニヨリテハ、夏ノ初ヨリシテ、彼處ニモ此處ニモ、聒シキマテ鳴キワタルニ、何ノ待心モ起

ラン」雁ノ玉章トヨムモ、漢ノ故事ナレト、今ノ旅人ハ聞クトモ誰カハ故里戀シト思ハン、然思フモノタマニハアリトモ、ソハ歌ノ爲ニ情ヲ矯ムルトイフモノ也、花橘ニ昔ノ人ノ袖ノ香ト云フモ、左近ノ陣ニ列ラレル官人ヲ慕フナルヘシ今ハタ、近キ人ヲナツカシムフト思ヘリ、皆識ノ下レル故ナリカシ」物ノ名ハ、電信ニモアレ、瀛船ニモアレ、字音ニテ呼ヘルモノハ。其儘ニ讀ミ入ルヘキフナリ。洋語ナルモ亦然リ、世ニハ字音ヲ嫌ヒテ、電信ヲ糸ノ便リ、瀛船ヲ黑船ナト、カヘテ詠ミタルモミユ、カクテハ後ノ人ノミカハ、今ノ人モ解シ難カルヘシ、歌ニハ字音ヲ雜ユマジキ規則ニテモアリヤト思フニ、菊ハキク、蝶ハテフト詠ムナラスヤ、勅ならもんともろしこし、軒ぢ紅梅花咲きよけを、八大龍王雨やめゝまへナト、カヽル例モ有ナリ、

寛曰、外國ノ船ヲ黑船トイフフハ、古クヨリイヘリ、今人ノ云ヒ初メタルコハアラス、

千信曰、地名物名、和學者勉和之、漢學者勉漢之、互相爲弊、作後世歷史之害最多、此段議論適切、以此得救兩弊、則論者實文學上良醫也、

昔ノ字音ハ雅。今ノ字音ハ俗ナランヤ。タヽ運用ノ工拙ニヨルヘキ歟。牛溲馬勃敗鼓ノ皮モ。良醫ハ用ヲ足ストソ云フナル。カヽル類ヲアケナハ、尙イクラモアルヘシ、ヨク〳〵注意スヘキフナラン、

尙末ニ言フヘキフハ、歌モ他ノ書畫ナトヽ同シク。事實ト美術トノ二ツノ性質ヲ具フルモノナレハ。アラユル歌ハ、悉ク事實ノミニ爲シ難キフアラン、タトヘハ書ハ載道之器、マタ足記姓名耳ナトヽイヘモ、端莊含婀娜カ書ノ妙境トイヒ、畫ハ寫生カ本ナレモ、王摩詰カ雪中ノ蕉葉モ、强ニ斥ケカタキカ如シ、歌モ亦然ナリ。カヽル類ハ擬古体トシテ。普通歌トハ別ヲ置クヘシ。世ニハ擬古ノ歌ノミヨミテ。眞ノ歌ナリトオモフモノ多シ。遺憾ノ限ナリ。貫之朝臣ノあなてりや虫のしゝや尻こ火ともきてトヨメルハ、東國人ノ擬作ナレト、本歌

清矩曰、擬作の圍を脫け出されい、支那西洋人の詩と、並ひたへんこと難かるべし、

ニ堪能ナル餘技ノ一與ナレハ、メツラシキナリ、天下ノ歌人誰モ〳〵擬作ノミナラハ、今ノ世ノ歌ハ誰カ作ルヘキ、歌ノ迹熄ムトモイヒツヘカラン乎

因ニイハンカ、童謠ヨ、亦世運ニ關係スルモノソ。慶長ノ初ノ頃トカヤ、九州邊ニテノ流行謠ニ、父ハ吾妻ヘ子ハ不知火ニ、櫻花ゥやちり〳〵ヨトイヒケリ、之ヲ聞カハ、亂離ノ後人々未其居ニ安ンセサリシ、狀テ想ハン其後咲〳〵ささくらヨなせ駒つなく、こまがいさめは花ゥ散るトイフカ有リ、コレヲ聞カハ、世治マリテ四境太平ヲ樂ム氣象ヲ想ハル、余カ故鄕ニテ村婦ノ謳ニ、たとひ姑ゥ鬼ても蛇ても、ああいとのでれ親ドやもの、マタ粉するさへこがんだ、とれ〳〵夏山どかんだやら此歌ノ意ハ、已ハ家ニテ粉磨サヘ、此樣ニ暑ク苦シキヲ、夫カ此夏天ニ、山ニ出テ、木樵セラル、ハ、イカ計リ熱カラント、夫ヲ思フ方言ノ歌ナリトイフ、勞シテ慕ヒ、怨ミテ正シキヲ失ハス、風化ノ厚キヲ知ルヘシ、若後人ヲシテ、今ノなんだんさいこ等ノ歌ヲ聞カシメハ、明治ノ御代ヲ何トカイハン。歌人ノ俗謠ヲ卑ムヿ、漢畫家ノ浮世繪師ヲ卑シムカ如クナレトモ、詩ノ國風モ、萬葉ノ東歌モ、當時ノ里謠ニ過キス、絶句モ短歌モ。昔ハ同ク伎人ノ口ニ謳ヒシモノナリキ。富家入道忠實ノ家ニテ、鏡ノ傀儡師マヰリテイフニ、カミ歌ニナリテ、世れ中は憂身にそへるこのけなれや、おそひをつれぞたなれざりけりトイフ、俊賴朝臣ノ歌ウタヒケリ、時ヨ朝臣候ヒテ、大ニ面目ヲ施コシタリ、永緣僧正傳ヘキヽテ、琵琶法師ニ厚ク賄ヒテ、れいも初音の心地こそすれトイフ我歌ヲウタハセケル、敦賴入道又コレヲ聞キテ、羨シクナモヒ、賄モセスシテ、盲人トモニ、謳ヘ〳〵ト責メケレ

寛曰里謠ニヨリテ方言ヲ知リ方言ニヨリテ古言ヲ發明スルコトアリ此事モ此ニ論シタシ

寛曰、敦頼入道ト、王昌齢高適等ノヿヲ併セ引ク、オモシロシ、

高見曰、唐人の考へいとりのけて如何、古學者然たる臭味あり。

ハ、世ノ物笑ヒトナリシヿ、鴨長明カ無名抄ニ出タリ、唐開元中、王昌齢、高適、王之渙齊名、時風塵未偶、而遊處略同、一日天寒微雪、三詩人共詣旗亭貰酒小飲、忽有梨園伶官十數人、登樓會讌、三詩人因避席隈、擁映爐火以觀焉、俄有妙妓四輩、尋續而至、奢華艶曳、都冶頗極、旋則奏樂、皆當時之名部也、昌齢等私相約曰、我輩各擅詩名、每不自定其甲乙、今者可以密觀諸伶所謳、若詩入歌詞之多者、則爲優矣、俄而一伶拊節而唱、乃曰、寒雨連江夜入吳、平明送客楚山孤、洛陽親友如相問、一片氷心在玉壺、昌齢則引手畫壁曰、一絶句、尋又一伶謳之曰、開篋淚沾臆、見君前日書、夜臺何寂寞、猶是子雲居、適則引手畫壁曰、一絶句、尋又一伶謳曰、奉帚平明金殿開、强將團扇共徘徊、玉顔不及寒鴉色、猶帶昭陽日影來、昌齢則又引手畫壁曰、二絶句、之渙自以爲詩名已久、因謂諸人曰、此輩皆潦倒樂官、所唱皆巴人下俚之詞耳、豈陽春白雪之曲、俗物敢近哉、因指諸妓之中最佳者曰、待此子所唱、如非我詩、吾即終身不敢與子爭衡矣、脫是吾詩、子等當須列拜床下、奉吾爲師、因歡笑而俟之、須臾次至雙鬟、發聲則曰、黄河遠上白雲間、一片孤城萬仞山、羌笛何須怨楊柳、春風不度玉門關、之渙即揶揄二子曰、田舍奴我豈妄哉、因大諧笑、諸伶不喻其故、皆起請曰、不知諸郎君、何此歡噱、昌齢等因語其事、諸伶競拜曰、俗眼不知神仙、乞降清重、俯就筵席、三子從之、飲醉竟日、

寛曰、コノ言大ニ理アリ、

コノ事集異記ニ見エタリ、亦一ノ韻事ナリ、伴信友氏カ神詠考ノ中ニヤアリケン、柳橋ナトノ藝妓ノ歌ヘル、都々一トカイヘルハ、今ノ歌人ノ歌ニモ優レルガアリトイフ言アリキ、見識アル詞トイフヘシ、今ノ歌人モ、或時ハ兒童ノ口ニ合フヘキ調子ニモノシテ、今ノ太

清矩曰、先年學士會院雜誌に載せたる、唱歌の拙論を參看したまへかし、

平ヲ謳歌セシメハ、是亦幾分カ風化ニ裨ケアルヘシト思フ也

丸山正彦曰、余ノ始メテ歌ヲ學ヒシ時、歌ハ物ニ感シ、心ニ思フ事ヲ、ヨミ出ツルモノナリト心得テ詠メリ、然ルニ師教ヘケラク、心ヲ古歌ニ深メテ後ニヨミ出ツヘシ、タヽ心ヲ師トシタランニハ、卑野ヲノカレガタシ、心ハ自公卿將相ノ如ク、高クモチテ、優ニナツカシク詠ミ出ツヘシナト、數々教示セラレタリ、因テ強テ八代集怜野草野ノ二集等、ハタ、うひまなびノ中ナル一二句ヲ綴リ合セテ、僅ニ課題ノ責ヲ塞クフナリキ、サテ思ノ外ニ善キ評得ルフモアリタリ、其時心竊ニ慷慨スレトモ未、口ニ出サヽリキ、萩野兄トハ、多年書燈ヲ共ニシ、議論ヲ上下シ、同ク此中ノ味ヲ嘗メ盡セルモノ也、此論中ニハ已ニ耳ニ熟スルモノアレトモ今之ヲ讀ム

ニ、文ノ雅健、說ノ卓偉、新ニ聽クカ如キヲ覺フ、此論世ニ出テナハ、歌學ノ面目ヲ一變シテ、明治聖代ノ餘光ヲ發揮センフ、手ヲ額ニシテ待ツヘシ、愉快哉、

雨宮于信曰、和歌古今集以後雖偏如流軟弱之風、然試通閲二十一代集、至新古今新葉二集、則有大動人者、按史、新古今之時則源平之亂方平、上有後鳥羽院明主下有定家家隆英傑、上下相得興起歌學、而天皇不啻勉歌學、兼有養士挽回王政之意、故當時詞隨有氣力、新葉集時則後醍醐天皇方滅北條氏、而皇族朝紳皆從國事、故其詞雄健、大超絶前世、延喜以下雖歌學漸降、隨時勢見其意如此、苟論歌學者、宜通觀大体察其所移也、

又曰、歌論一篇、老成之言、老成之文、著々切中時弊、敬服敬服

小中村義象曰、和歌ノ盛ナリシヨリ、王政ノ衰頽シシ狀ヲ論セラレタルヿ、尤詳ニ味アリ、歌題以下ニ至リテ、今少シ現今歌學者ノ弊ヲ痛論シ、遂ニ歌ハ詠ムヘキ者トカ、詠マストモヨキ者トカノ高說ヲ叙セラレナハ、猶一層ノ光彩ヲ添ヘント思ハル、

出之此論ヲ草シテ後、高崎正風先生ニ謁シテ益ヲ請フ、先生時流ノ鍼砭タリト賞セラレ、且高說ヲモ示サレタリ、今左ニ錄シテ評語ニ代フ、但書取ノ拙クシテ、文理貫カサルモノアラハ、其ハ固ヨリ余ノ責ニ任スル所ナリ、

高崎正風先生曰、歌ハ古今集ノ序ニ、心ニ思フヿヲ、見ルモノ聞クモノニツケテ言ヒ出セルナリトアル如ク、感情ヲ詞ニ發スモノナリ、タトヘハ鶴ノ青空ニ舞フヲ見レハ、余モ青雲ノ志ヲ遂ケント思ヒ、亡キ人ヲ悼ムキニ、花ノ散ルヲ見レハ、榮枯盛衰ノ感發リ、年壯キモノ、好逑ヲ得ント思フ時、胡蝶ノ雙ヒ飛フヲ見レハ戀ノ情起ルトイフカ如キ類ニテ、ハカナキ物ニ觸レテ心ニ感スル所ヲ其儘ニ讀ムヿ也、故ニ歌ハ盡理論ニ合フヘキニアラス、但情ハ上下古今ニ亘リテ、同キユヱニ、情ヲ述ヘタル歌ハ、誰聽キテモ感動スルナリ、後世ハ直ニ感情ヲ讀出スニアラスシテ、歌ノ爲ニ思考ヲ費シ、語格ナトノ議論甚喧シクナレルハ、大ナル誤ナリ、歌ハ口ニ唱ヘテ耳ニ入ルモノナレハ、主トスル處調子ニアリテ格ニアラス、譬ヘハ人小兒ノ園中ノ花ヲ折ルヲ見テ、ヤアソレヲ取ルト打殺スソトイハンニ、殺ストイヘハトテ、誰カ眞ニ毆殺スルモノト思ハン、調子ノ主トナルヿコレニテ知ルヘシ、古來歌學者

多シト雖、徒ニ語意ノ如何ヲ説キ、テニハノ係リ結ヒ等ヲ論スルノミニシテ、歌ノ性質ヲ悟リタルモノナシ、唯香川景樹ノ如キハ、歌ノ死活ヲ説キテ詳ニ其本旨ヲ明セリ

又曰、歌調ノ哀婉柔懦ナル弊ノ改良スヘキ事、本説ニ論シタルカ如シ、但カクナレル所以ハ、佛教ノ盛ナリシカ爲ニ、無常因果ノ説人心ニ浸潤シ、是ヨリ萬葉風ノ活潑ノ氣ハ次第ニ消滅シタルモノト思ハル、ナリ、

又曰、萬葉集ニ山上憶良カ朝堂宴會ノ夜、家ヲ思ヒテ詠メル歌ニ、憶良等ハ今ハまからん子泣らん、その母も吾を待つらんぞトヨメリ、妻子ヲ思フ感情ヲ、ソノマヽ發シタルカ、却テ千歳ノ下人ヲ感セシム又日雙斯皇子ノ薨去ノ後、其舍人カヨメル、東の多

藝御門(ギヨミカド)とさもらへど、昨日も今日も召すこともなしノ歌ノ如キハ、哀トモ淋トモイハスシテ、言外ニ無量ノ意思アリ、皇子ハ當時ノ儲官、遠カラス天位ニモ昇リ玉フヘカリシ人ナレハ、朝夕宮門ニ奔趨スル人多ク、召次ノフ承レル舍人ナレハ日々セワシカリシニ、俄ニ閒寂トシテ召サル、フモナキ有樣、言フ可ラサル妙趣アリ、カク感情ヲソノマヽ當時ノ詞ニテ言ヒ出セル故ニ、樵夫山賤マテ高妙ノ歌ヲヨミ出セルナリ、今ノ歌ハ古人ノ舌ト古人ノ耳トヲ借ラサレハ詠マレス、學者トテモ善歌ヲキ苦ナリ、本論ヨク卓見ヲ立テヽ、時流ノ蒙ヲ發クト云フヘシ、今憶良等カノ例ニヨリテ、正風カトヨマンニハ、人々ミナ笑フヘケレト、ソハ常語ヲ用ヰサル慣習ノ腦裏ニ固結シタル故ナリ、畢竟俗語ヲ詠ミ入ル、

コヲ禁シ、ハ、歌ノ一大厄ヲナシタリトイフヘシ、

又曰、或人景樹ニ語ラク、蜀山ハ洵ニ狂歌ノ名人ナリ、已、蜀山カ鹿ノ畫賛ヲ見タリ其方ガ啼聲きけば哀しいと、猿丸太夫がいふておのれたトアリ、景樹曰試ニ其畫ノ狀ヲアテ、ミン、大方半切ナトニ、鹿ヲ眞向ニ大ク書タルモノナルヘシト、客驚キテ曰、先生實見タルコアラン、景樹然ラストイヘト、尚疑ヒテヤマス、サラハ當レル故ヲ話ヘシ、其方トイフ詞ハ相對スルモノアリテ云フ時ノ詞ナラスヤ、之カ背面カ横向ノ鹿ナラハ、打ツケニ其方トイフ詞ハ出ヌ筈ナラスヤトイヒケレハ、客大ニ感服セリトソ、又或人歌ヨム心得ヲ問ヒシニ、其ハムツカシキコニアラス、見ルモノ聞クモノニ付ケテ、思フ事ヲ言ヒ出スヨリ外ナシトイフ時、門前ニ

豆腐賣ノ聲セリ、景樹それそこに豆腐の聲ぞきこゆなる、おさん出て見よゆきすぎぬ間ヨトヨミテ、先、箇樣ナモノゾトイハレタリ、實ニ思半ニ過クヘシ、凡テ景樹ノ歌ヲ說クニ前人未發ノ論多シ、一例ヲイハ、古今集ノ在原業平カ、千早振神代もきこのすノ歌古人ハミナ龍田川ニテノ歌トセリ、景樹ハ然ラス、コレハ集ニモ御屏風ノ畫賛トアリテ、禁裏ノ御屏風ノ事ナレハ、當時ノ畫工巨勢家ナトカ意ヲ用ヰテ、龍田川ノ水ハ紺青ナトニテ濃ク彩色シタル所ニ、紅葉ノ極メテ赤キヲ、ボト〳〵ト斑ニ畫キタラン、業平ソレヲ見テ、フト世ノ綾染トイフモノニ似タリト思フ感情起リシカハ、このら紅に水くゝるトヨメルナリ、身川ニ臨ミテ、豈綾染ノ感情ヲ起サンヤト說ケリ、其狀目ニ觀ルカ如ク、耳目ノ感發

シテ直ニ歌トナルヿ、ヨク會得セラル、ナリ、景樹カ歌學ニ深キハ、貫之以後一人トモイヒツヘシ、景樹ノ集桂園一枝ハ佳ハ佳ナレトモ、撰集ナルカ故ニ、本色ヲ見ンニハ日記ニ如カス、日記中ノ歌ハ其素論ト同ク、天眞煥發實ニ妙ナリ、但其書世ニ流傳セサレハ知ル人少シ、歌學ノ事ハ古今集正義等アレト、刊本ハ未、備ハラス、稿本ハ家ニ存スルナラン、

予愛古の癖あり、毎に古器物を觀るをとを好めり、古器物は唯形狀色澤の愛翫すへきのみならす、兼て古代の歴史風俗伎術も有樣をも考へ知らるゝ也、然れとも摸して作りさらんは、眞に迫るとも何乃益かはある、そも〳〵紀記萬葉等も、我邦書籍も最古きもの也、國土開闢も初より、歴代の世態人情、皆其上にあらはさゝ、後も人もりける歴史を見るゝ、強て紀記の古言を縫綴ぬて、古色を裝へり、このくても誰ゝ有益とも見ん、まして其さまの拙き城や、又歌よみは、萬葉古今も古言をのみ學ひて、無用の擬古に力を盡せる、共にこの大御代も文化に背くものと云ふへし、今此篇をよむゝ、共に其弊を通論してもらす所なし、知らす世の人は、猶古器物を摸造す

るの論と同一視するや否や。

明治廿年五月十日　松風閣主人千信ふるす

明治二十年六月廿七日板權免許
仝　年　七　月　出　板

著　者　東京府士族　小中村義象
府下麹町區富士見町五丁目拾五番地

仝　新潟縣士族　萩野由之
仝麹町區飯田町三丁目貳拾貳番地

出板人　東京府平民　吉川半七
仝京橋區南傳馬町壹丁目拾貳番地

椎図